
「嘘」と言う名の優しさ…。

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「嘘」と言つ名の優しさ…。

【Zコード】

N5772A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

嘘から始まり、嘘で終わる。俺は少し特殊な人間だ。そして、隣にいるこいつも…普通の人間ではない。

(前書き)

共同企画小説・「嘘」。他の先生方の小説は『「嘘」小説』と検索するとみれます。是非、ご覧下さい。

「嘘

優しい嘘をつこう。限りなく甘く…そして残酷な嘘を…。

* * * * *

隣を歩く女の子は楽しそうに、俺を見上げて笑っている。
年の頃なら、14・5歳といったところだらうか…。まだ、あどけ
ない表情を残している。

風に揺れる綺麗な黒髪が俺の腕を掠め、柔らかな感触が次にやつて
きた。

「ねえ、雅人さん。今日はどこ行くの？」

「んつ…特に決めてない。どこ行きたい？」

俺の腕に絡まる彼女の手に力がこもる。俺を見上げている瞳を細め、
何かを考えているようだ。

暫く唸っていたが、急にパッと顔を輝かせて

「遊園地っ！　私、一回も行つた事がないから、遊園地行つて
みたいっ！」

力いっぱいに答えた彼女は、嬉しそうに笑っている。その笑顔は、
本当に楽しそう。

「わかった。

それじゃ、行きますか？お嬢さん

「もうっ！私の名前はお嬢さんじゃないよっ！美尋みびって名前がある
んだから、ひやんと呼んでよお

「あだだだつ！痛いつて そんなに力いつぱいつかむなつて
つ」

頬を膨らませて、俺の腕を思いつきり掴んでくる美尋。その力は尋常ではない。

これは、確実にアザが出来たな…なんて怪力だ

まつたく…。

「そんな事より、早く行こ」つよお～！遊園地」

「そんなに急がなくても遊園地は逃げないって…おいつ！だから、引っ張るなつてつ！」

走り出したら止まらない…俺は、半ば引き摺られるよつてにして歩かされていた。

前を歩く もとい、半分駆け出している美尋。楽しそうに笑いながら、時々俺の方を振り返っては急かしていく。

「そんなに急ぐと転ぶ

」

「んつ？…ひや、わわわつ！」

注意をしようとしたが、それよりも先に転んだ美尋。お約束を分かつている奴だ。

できれば、俺の腕を離して欲しかったのだが…俺まで転ぶとは予想外。

「いつたあ～つ！…顔を打つたよお～」

「あのなあ…俺まで巻き込んで、何してんだ。お前は…」

強打したらしい顔をさすりながら起き上がる美尋。未だに俺の腕はつかんでいる。

いい加減、離してくれないと俺もうまく立ち上がれないのだが、多分聞いてくれないだろう。

「痛いよお～…雅人さあ～ん」

「……どれ。 大丈夫だ。怪我はしていないから問題ない」

打つたであろう額には”怪我”は見当たらない。赤くもなつていなし…それ以外の場所に怪我なんてない。

額をゆっくりと擦つてやると、顔を真っ赤して俺を見つめている美尋。面白い反応をする奴だな…。

「えっと…あの、もう大丈夫っ！ありがとう、雅人さん」

「そつか？…まあ、怪我はなくてよかつたな」

「うんっ！それじゃ行こう」

元気よく頷いて俺の腕をつかみ、また走り出す美尋。また、転ぶぞと心中で思つたがそれは言わなかつた。

その調子で、数回同じ事を繰り返して、俺達は目的の場所 遊園地に着いたのだ。

「 本日お休み？」

「 みたいだな…残念」

入り口には柵が置かれ

本日、緊急点検の為、休園

そう書かれた紙が一枚、風に揺れていた。

なんの点検かは知らないがとことんついてない奴だ。生まれて始めての遊園地がこれでは可哀相な氣もするけどな。

「 なつ…なんなのよーー！」

「 それは俺に言われても知らないぞ。…運が無かつただけだろう」大暴れして辺りを走り回つている美尋を他所に、俺はポケットから煙草を取り出して火をつける。

紫煙がゆっくりと上に昇つっていく様を、のんびりと眺めていると、膨れつ面の美尋が帰ってきた。

「 むうー！ じゃ次行つてみようつー！」

「 マジか…？」

呆れて煙草を落としてしまつた。これで三件目だぞ？俺は疲れた…いい加減に休まして欲しいものだ。

ここに来る前の2件共、何故かお休み。点検だ…改装だ…って、こういうものは重なるものなのかね…。

「ほらあ～つ！早く次行こうつ」

「わかつたつ！。分かったから、そんなに引っ張るな 強引に俺を立たせてから、引っ張つて歩いて行く美尋。どうしてそんなに元気なのか…。

いや、元気つて言うのもおかしいか こいつは疲れを知らないだけだからな…。

「うわあ～んつ！なんでなのよあ～」

「落ち着け、美尋。うるさいぞ」

その後、数時間かけて遊園地巡りに行つたが何故か全てが休み…。つづづく、ついてない奴と思いながら慰めるのに、随分な時間を使つてしまつた。

気づけば、辺りは薄暗くなつていた。随分と遅い時間になつたものだ。

未だに、俺の隣で半べそ状態の美尋。そんなに遊園地に行きたかったのか…。

「もういいだろ…そろそろ」

「私は…もつと遊びたいっ！」

言葉を遮るように話しだした美尋。その瞳は、寂しげで言葉が詰まる。

まだ、駄目みたいだ。もう少し時間が必要なのかもしれないな…。

「そうか…なら、何をして遊ぶ？」

「えつと…うんと」

首を忙しなく動かして辺りを覗つている美尋。何かを探しているようだな…遊ぶものなんてあまりない場所だが…。

ここは、町にある小さな公園。あるのは、ブランコやシーソーなど

の子供向けの遊具ばかりだ。

さすがにいい年した奴等が乗るには抵抗がある。俺は激しく遠慮したい気分だ。

「ブランコがいいな。雅人さんも一緒に行こう」

「んあ…俺はいいよ。えつ、ちょ…」

俺の言葉など無視して腕を引っ張つていく美尋。なんともパワフルなお嬢さんだ事…。

しかたなく、俺は美尋に連れられてブランコまでやつてきた。

「私乗るから、雅人さん押してっ」

「…はいはい。」

「それじゃ、行きますよ。美尋お嬢様」

「つむり…くるしゅうない」

上機嫌の美尋を乗せたブランコは、ゆつくりと動き出した。前へ…後ろへ…ゆつくりと、でも確実に勢いを増していく。

「きやあ～～～す～～～す～～～」

楽しそうにブランコで遊ぶ美尋を見ながら、俺はブランコのそばにある柵に座つて考えていた。

俺はこいつを しなければいけないのか…。できれば、素直に還したいのだが…。

果たして、こいつが素直に聞いてくれるのか…。それが心配だ。

「ねえねえ！雅人さん。一緒に遊ぼうよお～」

「んつ…ああ、分かつた」

無邪気に俺を呼ぶ美尋に多少の罪悪感を覚え出していた。いつまでも騙し続ける訳にはいかない。

嘘はいつかバレる

* * * * *

あの日、俺は仕事である場所にいた。そこでいつ

美尋に出

会った。

いや、正確には俺の仕事のターゲットがいつだつたんだ。

「いつまでそこにいる？」

「いやつ…こないで！」

泣きながら首を振る女の子。うずくまり、怯えた様子で俺を見上げている。

ここは、とある富豪が住んでいた屋敷。そして、この女の子はその富豪の一人娘。

しかし一ヶ月程前に、この屋敷は放火され、この屋敷にいた全ての人間は死んでしまった。

目の前の女の子もその一人 つまり、幽霊という訳だ。何故、俺にそれが見えるかというと…

俺が特殊だからだ。

「そう言つ訳にはいかなんだ…悪いが

「いやつ…こないで……私に乱暴しないでっ！」

かたくなに拒否する女の子に、多少イラついていた俺はどうやって説得するか考えていた。

手荒な真似はしたくないが、応じない場合は仕方ない。そう思い話し掛けた。

「何もしない…俺はお前を助けにきた」

「…………ほんとに？」

頬を伝う涙を拭う事なく俺を見据えている女の子。その時俺は、正直困っていた。

依頼者からの内容と事実が違すぎる事。それ以上に、目の前の女の子が何故か気になっていた。

屋敷の跡地に幽霊らしいものがいて私に危害を加えてくる

そ

う聞かされてやつてきたが、現実はこうだ。

明らかに、どちらが嘘をついているか分かる。あの男、…この土地が

田当てだな。

どこか胡散臭い感じの男だった 確かこの屋敷の主の弟と言つていたか…。

確かに金になりそうな場所だから。屋敷は燃え尽きて跡形もないが、土地だけでもかなりの価値があるだろう。

整地するにしても、こいつがいれば出来ないだろう。それで俺に依頼してきた訳だな…。意地汚い奴だ…。

死んでもまだ一ヶ月も経っていないのに、もう遺産がらみの話を始めているのか…。反吐がでそうだ。

「お前はもう死んでいるんだ…いつまでもここにいる事はできないんだぞ」

「知ってる。でも…どこにいけばいいか、分からぬの」

どうやら、本人には自覚はあるらしい。しかし、どこに行けばいいか分からぬか 確かに分からぬだろうな…。

突発的に死んだ人間は、死を受け入れる準備が出来てない。そのせいで、魂が状況についていけない時がある。

それが、こうやって浮遊霊や地縛霊なんかになってしまふ原因なんだけどな…。

「それは俺からは言えない…」

「きやつ！」

強制的に還すしかないだろう。あまり時間をかけてしようがない。俺も暇ではないのでな…。

右手に力を溜め…振り上げる。光の粒子が俺の腕に絡みつく。それは蛇のように複雑に絡みつき腕を覆い隠す。

右腕には光り輝く紋様が浮かび上がっている。これで送る準備はできた。後は

「綺麗…お兄ちゃん、天使さん?」

「……何を言つてゐる?」

俺の腕をじっと眺めながら、訊ねてくる女子。俺が天使？おかしな事を言う奴だ。

「とつても綺麗だよ…」

「そんな事より…俺は、お前を還す為に、ここに来たんだ」
急に静かになつたと思つたら、その瞳には薄つすらと涙を浮かべていた。泣かれても困る…これが俺の仕事だ。

気に食わない依頼者だが、きつちりやうないと金がもらえない。日々の生活も楽じゃないから…。

「…や…」

「んつ…？」

「……やつ…まだ嫌だ…私、やりたい事がある…！」
泣きながら首を振り、俺にしがみついてきた女子。見上げる瞳は
僕く揺れて怯えていた。

そんな目をされたら何も出来ないじゃないか…。俺もそこまで鬼ではない…一応な。

力を解除して、女の子の瞳を覗き見る。僕げに揺れ動く漆黒の瞳に
俺が映り込んでいる…とても綺麗な色をしているな。
澄んだ瞳をしている者は、純真な心を持っている。嘘はつけない…
嘘を見破れない。

長年の俺の経験から言わせてもらえばの話だが
100%は適当に
話を合わせるか…。

「なんだ？」言つてみる

「…遊び…たいの。私…家から出た事がないから…」
しがみつく手が震えている。身体も小刻みに震えているが、拒否される事が怖いのか…本能で怯えているのか…。
遊びたいか…しかし、こいつは何故こんなにも怯えている?

「家から出た事が…ない？」

「…うん。私は 家族に嫌われていたから…」

流れ落ちる涙。なるほど…こいつは家族から敬遠されていた訳か…。
それなら、これだけ怯えた様子はうなずける。

俺が同じ事をすると思つてゐるんだろう。だが、余程強く残つてゐるのだろうな……死んでまでこんな怯えるとは……。

それなら話は簡単だ。俺が優しくしてやればいい……嘘でもいいから優しくしてやれば俺を信じるだろ。」

そして、こいつの未練を断ち切つて還せばいい。面倒くさいがそれが一番手っ取り早そうだ。

それには……まずはこいつを連れ出して

「分かつた……連れて行つてやろう

「……ほんと? 私を連れて行つてくれるの?」

俺を見上げる瞳はまだ少し疑つてゐる。だから、俺は優しく微笑んでやつた。それが本当であるように。

嘘だと見破られたら終わりだ。見破られ事はないだろうが、慎重にそれでいて自然に振る廻らなくてはいけない。

嘘も方便。騙すのは簡単だ。これぐらいの年の子はお手のものだ。

「ああ……好きなところに連れて行つてやる」

「…………うんっ! ありがとう、天使さん」

優しく言つ俺の言葉を信じきつた女の子は嬉しそうに返事をした。

これで仕事ができる……面倒くさい事だ。

俺の手を握り立ち上がる女の子を連れて俺は屋敷を後にした。一応、名前を名乗つたが未だに俺を天使だと言つ。

俺の事を天使だと信じきつている……疑う事を知らんのか? それだけ純真という事の裏返しかもしれないが……。

その後、俺は色々な場所に遊びに連れて行つた。美尋は本当に楽しそうに遊んでいた。

俺の言つ事は素直を聞いてくれた。誉めてやれば嬉しそうに笑つていた。

笑う笑顔はとても可愛かった。そんな感じで俺を信じきつてゐる美

尋
尋 そして今に至る訳だ。

その間、俺は美尋について調べた。調べれば調べるほど、自分のついた嘘が胸を締め付ける思いがした。

ターゲットに同情してしまうと仕事に差し支えるが、こればかりはどうしようもなかつた…あまりにも酷い内容だつたからだ。そして、この出来事の本当の黒幕も分かつた…。

* * * * *

「早くう〜。雅人さん遅いよお〜」

「悪かつたつて…それで俺はどうすればいいんだ?」

ふてくされて、むくれている美尋は、そっぽを向いて拗ねている。その表情は年頃の女の子そのものだ。

この子を還さなければならないかと思うと辛いものがある。しかし、ここは生ある者の世界。

死んだ者はいつまでもこの世界に留まつてはいられない。

「ブランコ押してえ〜」

「分かつた」

後ろに廻りゆつくりと美尋の背中を押す。小さな背中…それが目の前で大きくなつたり、小さくなつたり…。

こんな子に…あいつ等は何をしていたんだ。こんないい子に虐待を加えるなんて…。

母親の虐待…父親の性的暴行。拳句は、使用人…他の奴等からも

。

人を疑う事を知らなかつた美尋に、大人達はやりたい放題。それでも美尋は我慢していた。

信じていた…いつか、自分を大切にしてくれる事を望んで い

つか終わるだろうと心の中で唱えながら…。

だが、日増しにエスカレートしていく虐待…暴行…。それが自分の限界を超えた時 あの出来事が起きた。

誰も信じられなくて、あんな事をしたんだろう…。逃げたかったの

だろ？…あの苦痛に満ちた世界かい。

「ねえ…雅人さん」

「ブランコを漕ぎながら聞こえる美尋の声。少し泣いているように聞こえる。

悲しげに響く声が辛い。

「楽しかったよ。もう…私、満足だよ…」

「…美尋」

「雅人さんと出会って…私、初めて優しくされて……とても嬉しかった」

ブランコは動きを止めていた。俺を見上げる美尋の顔は優しく微笑んでいた。本当に疑う事を知らない奴だ。

俺だつて、汚い大人達と同じ仲間なんだぞ？なんで、そんな顔で俺を見られるんだ…やめてくれ。

「初めて…優しくされて…私嬉しくて…いっぱい、甘えて

「美尋…俺は優しくなんかないぞ」

「そんな事ないよ…すっごく優しかったもん」

いつまで俺に微笑を向けていてくれる美尋。その微笑みは辛い…俺はお前に嘘をついたんだ。

「その優しさは…嘘かも知れないだろ…」

「ううん…雅人さんは嘘をつかないよ。私、信じてるから…優しい雅人さんを」

「つ！」

首を横に振り否定する美尋。どうしてそこまで信じられる…俺の事をどうしてそこまで信じられる。

俺は…俺は…お前を騙して連れ出して……そして、還してお金

を貰おうとした最低な男だぞ！

「遊園地は残念だったけど…私、もう行くよ。…だから…」

「ここまで俺を信じてくれている美尋に、返す言葉を見つからない。

「私…どこに行くのかな…やつぱり…」

この子は不幸過ぎる…誰も救つてやれなかつたのか。あの家族では無理だろ？…あの屋敷には美尋の味方なんていない。救いはない…これは変えられない運命だ。だが、せめて…少しひらい救いがあつてもいいじゃないか。

「美尋…お前は天国に行く…だから心配するな」優しく頭を撫でてやると嬉しそうに手を細めて微笑んでいた。その瞳には涙を溜めて…。

「安心しろ…お前は天国に行ける…」

「そつか…雅人さんが言つなら大丈夫だね」

「美尋…」

「雅人…さん？」

顔をあげて俺を見る美尋。その顔は少し驚いているように見える。その時、初めて気づいた…自分が泣いている事に…。俺はまた、美尋に嘘をついた。

救われない…本当に、このままいいのか。だが、俺には変えられない…それが運命だから…。

「美尋…お前は今まで辛い思いや、苦しい思いをしてきた」

「…つ…」

胸を押さえて辛そうな顔をする美尋。変えられないのが真実だし

かし

「でも…お前がこれから行くところは……きっと素晴らしいところだ」

「…雅人さん」

優しく頬を撫でてあげる。びっくりしている美尋…少しづつ顔が赤くなつていく。

「だから…心配するな。俺の保証付きだ」

「うん…ありがとう。雅人さん」

優しく微笑んでいる美尋を見ていて、また涙が出てきた。俺を信じ

きつている美尋。

俺は、最後までこの子を騙し続けるのか。仕方ない事 素直に

還つてもうう為… そう言い聞かせていたが

「そつか… 嬉しいなあ… 天国つてどんな所だらう…」

「綺麗なところだ… とてもいい所だぞ」

「うなんだ… 雅人さん、天使だもんね」

本当の事は言つたら、美尋はどうするだらう。嘘はつきたくない…。

でも、この子を見ていると本当の事は言えない。

美尋の額に手をあてる。力を解放した腕は光を放ち、暖かくなる掌でそつと顔を撫でる。

美尋の頬を涙がまた一つ 綺麗に流れていく。準備は整つた。後は… 還すだけだ。

「ああ… そうだ。だから、詳しいんだ」

「そつか…。それじゃ、先に行つて待つてるね…」

「ああ… また遊んでやるよ」

「約束… だよ」

頬を伝う涙が、痛いほど俺に胸に突き刺さる。また、俺は嘘をついている… 最後にとんでもない嘘を…。

この子が今から行くところは… 天国なんかじゃない。とても苦痛を

伴う場所 地獄だ。

「雅人さん… 優しくしてくれてありがとう」

「… 美尋」

優しく微笑む美尋が俺に抱き締めてきた。力強く廻された腕は微かに震えていた。

「ありがとう… 雅人さん。それと

「

ゆっくりと俺から離れていく美尋を光が包み込む。優しく抱き締めるように包み込む光の中で

美尋は微笑んでいた。

消えていく美尋を見つめながら、幾筋もの涙が頬をつたって落ちていく。気づいていたんだ…俺の嘘に…。

美尋は、消える間際に俺にこう言つた
「天国の嘘…下手だ
ね」と…。

残酷だ…どうして、美尋がこんな目に会わなくてはならないのか…。
本当ならば、美尋は天国に行ける筈だった。
それなのに…地獄へ行く事になつたのは
あの日起きた出来事。

あの屋敷は放火で全焼した。その放火をしたのが美尋だ。ただ、あの苦痛に満ちた日々を終わらせる為に…。

それが例え間違つた手段でも、逃れたかつたのだろう。
放火をして家族全員とその他の人間を殺した罪で、美尋は裁かれなければならない。

しかし、それを裏で操つていた奴がいた
美尋の父の弟。つまり、俺の依頼者だ。

美尋をそそのかして…そして彼女の運命すら変えてしまつた男。

「この世には…神はないのか…」

空を見上げ怒りを噛み殺した。流れる涙が俺の

美尋へのせめ

てもの弔い。

俺の言う事を信じて、微笑を浮かべていた美尋。あの笑顔は俺を信じ…許していた証。

それを俺は嘘で

最低な奴だな…俺は…。

救いが無い世界は誰が救う…。救われない魂は誰が導く…。やるせ

ない思いが駆け巡る

「……」

俺は携帯を手に電話をかけた。相手は

依頼者であるあの男。

本当に救われない奴を地獄に落とす為に……

腐った魂を裁き……永久の苦しみを『』
えれる。

踵を返し　　俺はその場を後にした。

「腐った魂には……容赦はしない。
地獄の底に……呑き落してや
る」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5772a/>

「嘘」と言う名の優しさ…。

2010年10月17日08時00分発行